

## はじめに

今年度も地域振興機関誌VISIONを世に送り出すことができた。今年度の執筆者は、山梨県立大学国際政策学部総合政策学科安達研究室に在籍する2年生（第8期生）7名で、レポート数はこれまでで最多の14本。本号も昨年に引き続き、日本と英国を取材先とし、構想、取材、執筆、編集と作業を進めてきた。昨年のように明確なテーマ設定は行わなかったが、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネスに関するレポートが多く、内容も食を中心としたコミュニティの形成、農村振興、自然環境の利活用、歴史的街並みの保全と、多岐に渡っている。

日本編に関しては、農山村振興に関する内容のレポートが3本あり、いずれも山梨県内の事例だ（えがおつなげて、た・から、フォレストアドベンチャー）。その他は東京近郊の事例で、これまでのVISIONにはないラインナップだ。みんなのキッチンとBABAラボは、女性によるコミュニティ・ビジネスの好例で、宮前重金属発掘計画はヘヴィーメタルを使った異色のまちづくりとして興味深い。もう一本は景観まちづくりの先駆け・妻籠宿だ。伝説の人物小林俊彦理事長のお話を聞いたのは本当に貴重だった。どの事例も、方向性は異なるものの、地域資源を活かしながら、地域発展のための方策を展開するという意味では共通している。

本号でも昨年に引き続き、ロンドンでの取材旅行を実施した。学生達は持っている英語力を駆使してアポイントメントを取ろうと試みたが、昨年以上に難航を極め、渡英前にアポイントメントが取れていたのは1名であった。飛び込みで何件か取材できたが、視察のみで終わってしまったケースが出てしまったのは残念であった。しかしながら、内容は充実しており、英国におけるソーシャルな食のバリューチェーンがみえる3本の論文（Grow Up, The People's Supermarket, FIFTEEN）。伝統の国英国における自然環境・歴史的建造物の保全の代表事例ナショナルトラストとCity of London。さらには、新たな動きとしてのロンドンの緑化事業（Tree and Design Action Group）やD級スポットを巡るアーバン・アドベンチャーなどの興味深い記事もある。

このように、「VISION」本号も、様々な視点（VISION）からの地域振興事例、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネスの事例が並んだが、学生の社会に対する関心の高さが反映されたラインナップとなった。学生の目あるいは心に「見えた」地域振興の事例が、読者の皆様にとって有益であることを願っている。また、単純に読み物として楽しんでいただけたら幸いだ。

我がゼミ生が書き切った14本の記事をじっくり読み、忌憚のないご意見をいただけると幸いである（adachi@yamanashi-ken.ac.jp）。なお、本機関誌は、本学サービスラーニングプロジェクトから経済的な支援を受けている。この場を借りて感謝の辞を述べたい。

山梨県立大学 国際政策学部総合政策学科 准教授 安達義通